

論文

留学生周樹人周辺の「ニーチェ」及びその周辺*

李 冬 木

〔抄 録〕

本論では、テキスト調査により、周樹人（のちの魯迅）が留学時代に書いた論文である「文化偏至論」に記述されているニーチェの言説は、彼がニーチェの原書を読んでもまとめたものではなく、桑木巖翼『ニーチェ氏倫理説一斑』から直接翻訳されたものであることを初めて発見し、当時清国留学生であった周樹人が実際に直面した「ニーチェ」の真相を実証的に明らかにしたものである。その上で本論では、これまでの先行研究における「魯迅とニーチェ」の関係の枠組みにおいて論じられてきた「ニーチェ」は、ほとんど留学期の周樹人が実際に直面した「ニーチェ」ではなく、「魯迅」となった以後の「魯迅」を想像することによって構築された「ニーチェ」であると指摘した。さらに留学生周樹人の周辺の「ニーチェ」とその周辺を考察し、ドイツ語、丸善、高山樗牛および「美的生活論争」などを含め、当時の「魯迅」がニーチェに接していた思想的環境を再現することを試みた。

キーワード：周樹人、ニーチェ、周辺、桑木巖翼、個人主義

はじめに 「周樹人」視点での「ニーチェ」

「魯迅と明治日本」は過去の「魯迅とニーチェ」という研究の枠組みの中で、一つの課題の範疇である。本論が探ろうとする問題もその中にある。その意義から言っても、やはりその範疇の研究課題の継続である。しかし、二点、過去の研究と異なる点がある。

一つは研究視点の調整である。具体的にいえば、過去の「魯迅」という研究視点を「留学生周樹人」へと調整した、ということである。この調整は観察の角度の転換であり、魯迅（1881-1936）を形作る部分である留学生周樹人を魯迅という研究対象から切り離し、独立させ魯迅の外へ出た別の存在に変えてしまう、という意味ではない。留学生周樹人がその歴史の現場に身を置いていたことを再現しようとする試みで、魯迅が「魯迅」となってからの「魯迅」に関する

る膨大な「解説」が、それ以前の彼についての歴史的観察に与える影響を極力軽減しようとしている。

この視点の調整に伴って、同じ枠組みの中に位置する「ニーチェ」にも、おのずと変化が生じる。このような変化はニーチェについての一つの問いを直接もたらし、すなわち当時清国の留学生であった周樹人が実際に直面したのは一体どんなニーチェだったのか、ということである。周樹人の視点からこの問題を明確に提起し、それを解明しようとした点が、おそらくこれまでの研究ともう一つ異なる点であろう。

方法についていえば、本論は「周辺」という概念を導入した。これは相対的な概念である。「ニーチェ」をある種の枠組みの中の問題とすると、「ニーチェ」は周樹人の周辺に浮かび上がる焦点となり、それにおのずから一つの周辺を帯びる。しかし、実際には、問題の枠組みを調整して、他の問題に目を向けると、同じように周樹人の周囲に多くの焦点が凝集し、浮動していて、まるで小石をつかんで静かな水面に投げたようなものである。具体的な人物についていえば、「ニーチェ」という焦点と並列できる者は延々と続く、トルストイ、ショーペンハウエル、シュタイナー、イブセン、キルケゴール、バイロン、シェリー、レールモントフ、プーシキン、ペターフィーなど。理論からいえば、周樹人が仙台から東京へ戻ったのちに著したいくつかの論文、「人間の歴史」(『墳』を編んだ時、「人之歴史」を改題)「摩羅詩力説」「科学史教篇」「文化偏至論」「裴多菲論」「破悪声論」の中で触れた人物と事件は、基本的に周樹人が周辺から選び取って彼の文章の中に集めた各種の関心対象と見なすことができる。いわゆる「問題意識」をその中のどこか一点に向けさえすれば、それを「焦点」と成しうるのである。つまり、本論が取り上げたのは単に周樹人周辺の一つの焦点、すなわち明治の「ニーチェ」及びその周辺であるに過ぎず、それは周囲の相互作用と必要な時に触れるだけである。本論では「周辺」の事項について調査と整理を行い、それを記述し主体を目立たせる方式で周樹人と彼の「ニーチェ」を提示するものである。

以下に、二つの問題から始めよう。

I 「尼佉氏……之言曰」はどこから出たのか？

これは『魯迅全集』のある注釈にも関係する。第一巻に収録されている「文化偏至論」は、1907年に書かれ、1908年8月『河南』雑誌第7号に発表された、「迅行」と署名⁽¹⁾、原文「尼佉……之言曰」というかたちで「尼佉(ニーチェ)」のことばを記している。これは魯迅の留学時期のテキストにおいて「ニーチェ」に触れた7ヶ所⁽²⁾の内の一つである。当時はまだ「尼采」(ニーチェ)の二字を用いておらず、「尼佉」と記している。

德人尼佉(Fr. Nietzsche)氏，則假察罗图斯德罗(Zarathustra)之言曰，吾行太远，子

然失其侶，返而观夫今之世，文明之邦国会，斑斓之社会矣。特其为社会也，无确固之崇信；众庶之于知识也，无作始之性质。邦国如是，奚能淹留？吾见放于父母之邦矣！聊可望者，独苗裔耳。此其深思遐瞩，见近世文明之伪与偏，又无望于今之人，不得已而念来叶者也⁽³⁾。

日本語訳

ドイツ人ニーチェ (Fr. Nietzsche) はツァラトウストラ (Zarathustra) のことばを借りていった——私は遠くまで歩きすぎて、伴侶を失いひとりとなった。いまの世をふりかえてみると、それは文明の国であり、華麗な社会である。だがこの社会は、確固たる信仰をもっていない。民衆の知識は創造性に欠けている。このような国にいつまでも留まっておられようか。私は父母の国から追放された。まだ期待できるのは子孫のみである、と。これは彼が深思遠望によって近代文明の虚偽と偏向を看破し、今日の人に望みを絶ち、やむをえず未来に思いを寄せたのである⁽⁴⁾。

「尼佉 (Fr. Nietzsche) 氏」の「ツァラトウストラ (Zarathustra) 之言」の出处に関して、1981年版の『魯迅全集』は以下のように注釈する。

日本語訳

ツァラトウストラ [原文「察羅図斯德羅」]。ふつう「札拉图斯特拉」と音訳。ここで引用して述べられていることばは、ニーチェの主要な哲学著作『ツァラトウストラはこう語った』の第一部第三十六章「文明の地」(原文とは多少ちがいがあある)にみえる。ツァラトウストラとは、紀元前十、九世紀のペルシア教の創立者ゾロアスター (Zoroaster) である。ニーチェは本書においてこの人物を借りて自己の主張を宣伝したのであって、ペルシア教とは無関係である⁽⁵⁾。

人民文学出版社2005年版18巻本『魯迅全集』は一字の違いも無くこの注釈を踏襲しており、原文はやはり変わることなく『『ツァラトウストラはかく語りき』第一部第三十六章『文明の地』』⁽⁶⁾である。しかし、今問題なのは、30数年保持してきたこの注釈は信頼するに足るのか、ということである。

手元にある数種類の「ツァラトウストラはかく語りき」のテキスト⁽⁷⁾に基づいて確認したところ、「第一部」あるいは「巻之一」に「第三十六章」という章は見えず、その章にある「文明の地」という名称も見いだせない。最近、邦訳の『魯迅全集』を繙いた際、「訳注」の中で「文化偏至論」の邦訳と訳注を担当された伊東昭雄教授が30年前に早くも私と同様の不都合に行き当たっているのを偶然発見した。教授は「文明の地」は『『ツァラトウストラはこう語った』には第一部第三十六章というのは見当たらず』とし、継いで「第二部第十四章「教養の国

について」(Vom Lande der Bildung)である」⁽⁸⁾と指摘している。これを徐梵澄の訳本と対照すれば「卷之二」の「文化之地」⁽⁹⁾であり、尹溟の訳本と対照すれば、「第二部」の「文化之邦」⁽¹⁰⁾であり、錢春綺の訳本と対照すれば、「第二部」の「文化之国」⁽¹¹⁾であり、日本の生田長江の訳本は「文化の国土」⁽¹²⁾とし、氷上英広の訳本は「教養の国」⁽¹³⁾、藺田宗人の訳本でも「教養の国」⁽¹⁴⁾とし、その他も同様である。しかし内容から見れば、確かに「文化偏至論」で述べる箇所とはほぼ同じ意味である。これに基づくに、前に触れた『魯迅全集』の「ツァラトストラ」のテキストの来源に関する注釈は訂正でき、少なくとも当座のところ「第一部第三十六章」から上述の範囲内へと正すべきであると言える。

しかし、それだけで問題が解決するわけではなさそうである。上述の各テキストに関連する部分と仔細に照合してみると、「文化偏至論」の「尼佉氏……之言曰」の部分は、単に「原文とは多少ちがいがあある」どころか、かなり異なっており、少なくとも形としては、『ツァラトウストラはこう語った』の引用ではなく、わざわざ数語でこの一章を要約しているに過ぎない、ということがわかる。となると、この「要約」は「迅行」と署名した作者自身が原書に基づいて書いたものなのか、それとも他人の概説等を参考したものなのか。という問題が生じる。しかしいずれの場合も、「原本」の問題に触れねばならず、前者の場合、「迅行」がどのような『ツァラトウストラはこう語った』のテキストに基づいて概説しているのか。後者の場合は、「迅行」はどの文献を参考にしたのかということになる。——これら具体的な問題に対する研究の不備のために、魯迅の注釈上の粗雑さと研究上のあいまいさをもろに引き起こしてしまったのである。例えば、多くの研究者は魯迅の早期のテキストにおける「尼佉氏」「大半は当時の流行の観点を踏襲した」⁽¹⁵⁾と認識しているようだが、実証的な裏付けがないために「判断」は「推測」にとどまり、一体どのような「当時の流行の観点」が初期のニーチェの中国における導入を後押しし影響したのか充分には答えていない。

管見の及ぶ限りでは、上述した魯迅のテキスト中に見られるツァラトウストラの「要約」について問題としたのは尾上兼英である。氏は前世紀の50-60年代の日本における「魯迅研究会」のリーダーであり、「魯迅とニーチェ」という研究視点を提出した最初の実践者であり、伊藤虎丸から「私たちの“主将”」⁽¹⁶⁾と呼ばれていた。

尾上兼英は、「文化偏至論」を「引用するしかた」について、「その意をとって要約し、再構成している」⁽¹⁷⁾と考え、「『ツァラトストラ』第二部「教養の国」の原文と比較してみると、比喩的表現を切りすてて一章の主題を簡潔にまとめ、自説の補強に利用していることがわかる」⁽¹⁸⁾と述べている。つまり氏から見れば、「文化偏至論」に出てくるニーチェのくだりは、「魯迅」が「『ツァラトストラ』第二部「教養の国」の原文」を読み、要約・整理した結果だ、ということである。まさしくこの認識に基づいて、氏はさらに踏み込んだ分析を展開し、「しかし、その際の重点のおきかたが、両者に差のあることは注意しなければならない」と論じている。そうして「ニーチェの場合」はどのようであったか、「魯迅の眼に」はまたどうであっ

たか……が始まったのである⁽¹⁹⁾。

以上に示した尾上兼英のこの研究は1961年に発表されたもので、半世紀以上前のことである。「文化偏至論」に出てくる「ニーチェのことは」を重視しただけでも、大きな貢献である。ただ惜しいことにこの成果が二種の『魯迅全集』（1981、2005）の注釈に吸収されていれば、あれほどの章節表示上の疎漏は起こらなかつたはずである。私も最近この論文を読んだばかりで、勉強とは別に過去の研究を振り返る機会を与えられた。反省の一つが、本篇の「はじめに」述べた「研究視点」の反省である。周知のように、戦後日本における魯迅研究の基本的な考え方は、中国の近代を魯迅になぞらえて、日本の近代を反省するというものであった。この中には「魯迅」を強大化する傾向があり、学者たちは自ら関連テキストへの検証を放棄することになった。「魯迅」の名の下に置かれたテキストの独自性を信じて疑わず、相手が「魯迅」ではなく、留学生周樹人が残したテキストであることを忘れてしまったのである。「魯迅」のテキストである以上、オリジナルであることは当然である。そうでなければ、「魯迅」が「その意をとって要約し、再構成している」とどうして断定できたであろうか。「魯迅」が「比喩的表現を切りすてて一章の主題を簡潔にまとめ、自説の補強に利用している」とどうして断定できたであろうか。——しかし、半世紀前の先達の研究を今咎めだてするものではなく、現在のことを言っている⁽²⁰⁾。目下の「中国現代文学史」の枠組みでは、同様の誤りがでていささかの不思議もない。

話を本題に戻そう。「文化偏至論」に出てくる「ニーチェ」は、作者「迅行」あるいは「周樹人」がニーチェの「原文」に対して行った要約ではなく、他の人がまとめた要約である。さらに正確に言えば、他の人の要約を中国語に翻訳して、自分の文中に「拿来（持ってきた）」ものである。

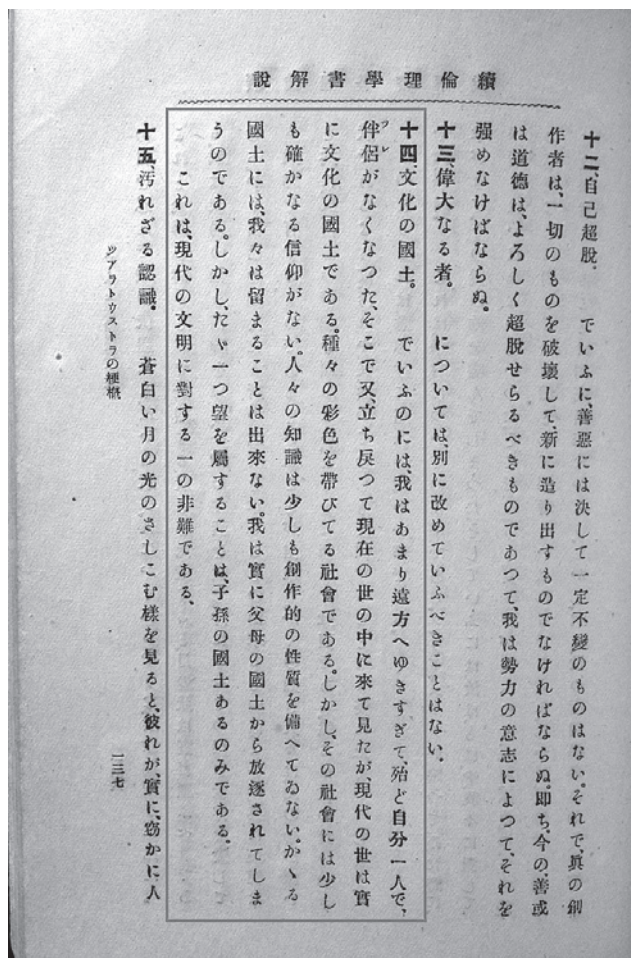
原本は桑木巖翼（1874-1946）『ニーチェ氏倫理説一斑』の第一三七頁に見える。6頁の写真中の枠内を参照されたい。

【転写】

「十四. 文化の國土でいふのには、我はあまり遠方へ行きすぎて、殆ど自分一人で、伴侶がなくなった、そこで又、立ち戻って現在の世の中に来て見たが、現代の世は實に文化の國土である。種々の色彩を帯びてゐる社會である。しかし、その社會には少しも確かなる信仰がない、人々の知識は少しも創作的の性質を備えてゐない。かかる國土には、我々は留まることは出来ない。我は實に父母の國土から放逐されてしまうのである。しかし、ただ一つの望を属することは、子孫の國土あるのみである。

これは、現代の文明に對する一の非難である。」⁽²¹⁾

このくだりは桑木巖翼が同書に書いた「ツァラトゥストラの梗概」の一節である。「迅行」（周樹人）は素晴らしい筆致でほとんど一字も漏らさず主段落を翻訳し、「尼佉氏……之言



曰」(前出中国語原文を参照)をいっそう力強くさせた。最後の評語も、原意は照納するものの、迫力不足なのを嫌つてか、自己のより強い読後感を増補し、それを自身の論じる「偏至」の文脈に合致させている。「文化偏至論」と照らし合わせてみれば一目瞭然となるであろう。

この発見は、周樹人すなわち後の魯迅と明治の「ニーチェ」のテキストとの間に存在する不可分の関係をテキストレベルで初めて実証したものであり、周樹人と時代環境との関連にもう一つ確証としての「実証」を加えた意義は明らかであり、少なくとも上のテキストを翻訳した例証から、「ニーチェ」が一種の心像 (image) として周樹人の身の上にとどのように構築されたかをなぞることができる。

II 何者が「引以為大詬」したのか？

引き続き「文化偏至論」である。その第四段落の冒頭にこのようなくだりがある。

個人一語、入中国未三四年、号称识时之士、多引以为大詬、苟被其溢、与民贼同。意者未遑深知明察、而迷误为害人利己之义也欤？夷考其实、至不然矣⁽²²⁾。

日本語訳

個人ということばは、中国に輸入されてまだ三、四年にもならないが、時事を知ると自称する連中が人を罵倒するのにしきりと使っており、もし個人主義者というレッテルをはられると、それは民衆の敵と罵られるのと同じである。思うに、この連中はことばの意味を深くははっきりと理解することもせず、誤って、他人を害し己れを利するという意味に使っ

ているのではなからうか。偏見なしにこのことばの實質を考えると、決してそのようなことではない⁽²³⁾。

明らかに、これは「個人一語（個人ということば）」という正当な名のための弁明であり、そこには当時の「個人」あるいは「個人主義」をめぐる思想的波紋が感じられ、それによって作者も巻き込まれたと断言することはできないが、少なくともこの思想的波紋の屈折と見なすことができる。鋭敏な研究者は、屈折してくる波をとらえて探ろうとする。董炳月はその著書『「同文」的現代転換——日語借詞中的思想与文学』でこの考察を試みた。同書の第三章は『「個人」と個人主義』を題とし、「清末民初の約二十年間における中国の『個人／個人主義』の言説を体系的に整理し⁽²⁴⁾、その中で「文化偏至論」を「中国現代思想・文化史上初の個人主義思想を正面から述べた文章⁽²⁵⁾」としている。そして「個人ということばは、中国に輸入されてまだ三、四年にもならない」という一文について、「彼が『個人』という言葉を外来語としたこと、そして『個人』という言葉が中国に入ってきた時期を1903～1904年の間と規定したことを意味する⁽²⁶⁾」と主張した。そして「魯迅のいわゆる『個人ということばは、中国に輸入されてまだ三、四年にもならない』という『中国』は完全な意味での『中国』ではなく、彼が身を置くべき日本における中国人の言論界である⁽²⁷⁾」としている。この前提の下、董炳月は「20世紀初めの東京を中心とする日本華人界の言論状況」を⁽²⁸⁾考察した。その成果は著しく、「日本の中国人言論界」「個人」の言説の大観を呈している。さらに大きな意義は、中国人の言論界には、「個人」や「個人主義」を「他人を害し己れを利」し、「人を罵倒するのにしきりと使って（原語、引以為大詬）」いるというケースが存在しないことを反証したことにある。1902年に書かれた梁啓超の文章であれ、1903年に出版された『新爾雅』、ないしは1904年に上海で創刊された『東方雑誌』の関連記事に、「引以為大詬」という言論が見つからず、同書の梁啓超を考察した結論を借用すれば、いずれも「『文化偏至論』のいわゆる『「個人」を人を罵倒するのにしきりと使って』いる言葉とみなすほどではない⁽²⁹⁾、ということである。

さて、一体何者が「個人一語」を「引以為大詬」としたのか。

本論が提供する思考回路は、いわゆる「言論界」の範囲は必ずしも字面の「中国」にこだわらないということである。もし必ずや「中国」という文字をつけていなければならないのであれば、東京の「中国人言論界」を取り巻く日本の言論界でもあるはずだ。なぜなら、後者に限って、「個人」あるいは「個人主義」を弁別しなければならない場合があるからである。「文化偏至論」に見られるのは、当時の日本の言論界におけるニーチェの「個人主義」をめぐる論争が周樹人に投影したものと見るべきであり、彼が「偏見なしにこのことばの實質を考えると、決してそのようなことではない（原文は「夷考其实，至不然矣）」と判断したのは、まさにこの論争によって確立された「個人主義」に対する価値選択であった。ある意味では、それを引き合いに出して自己形成をしているとも言える。

これも本論の結論の一つであるが、あらかじめ提示しておく、周樹人は自分の周辺の「ニーチェ」に関する波動の中から、道徳的立場からの「ニーチェの個人主義」に対する攻撃を切り捨て、「ニーチェ」を「道学先生たち」のいわゆる「利己主義」という呪縛から分離し、自分の中で「精神界の戦士」として確立した。いわゆる「周到なる比較をしてはじめて自覚が生ずるのである（原文は「比較既周，愛生自覚」⁽³⁰⁾）⁽³¹⁾も、周樹人が身近な「ニーチェ」に直面した選択に当てはまる。

以上の二つの題目は、いずれも現存する魯迅のテキストによって立てられたもので、問題の提起である。次は具体的に展開していく。しかし、周樹人をとりまく「明治のニーチェ」を具体的に描く前に、「魯迅と明治のニーチェ」というテーマについて簡単な整理を行い、本篇の出発点を確立しようと思う。

Ⅲ 「魯迅と明治のニーチェ」に関する先行研究

もちろん、整理といっても、あくまで個人の視野の下の整理であるに過ぎず、遺漏があることは言を俟たない。魯迅とニーチェの関係は、おそらくは「魯迅」が誕生した時点から、彼の身近な同時代人に注目された。そうでなければ、劉半農がどうして後に広く知られた対聯「托尼文章，魏晉風骨」（「托」はトルストイ、「尼」はニーチェ）⁽³²⁾を贈ったであろうか。魯迅の晩年になると、瞿秋白がああ有名な『魯迅雜感選集』序言で再度「魯迅とニーチェ」の関係⁽³³⁾を指摘した。このような関係は、まもなく国内外の学者にも注目されるようになり、例えば、李長之（1910-1978）の『魯迅批判』と竹内好（1910-1977）の『魯迅』には、「ニーチェ」がたびたび登場し、魯迅がニーチェの影響を受けたこと⁽³⁴⁾や「ニイチェを酷愛した」⁽³⁵⁾ことが言及されている。彼らの後まもなく、郭沫若はさらに一歩進んで、「魯迅と王国維」がニーチェに熱中したのは、二〇世紀初めにニーチェ思想とドイツ哲学が日本の学界で大流行したと関連があることを指摘した⁽³⁶⁾。ただ惜しいことに、この暗示に満ちた注意はその後の研究者の視線を魯迅と「日本学界」の「ニーチェ」への具体的な関心に引きつけることはなかった。二〇世紀九十年代以後、中国で「魯迅とニーチェ」に関係する研究は盛んに行われ、張釗貽の言によれば、「関係研究著作、汗牛は棟に充ちて、今まで衰えることを見えない」⁽³⁷⁾である。幸いにも張夢陽『中国魯迅学通史』⁽³⁸⁾の巨視的な記述と張釗貽による「魯迅とニーチェ」⁽³⁹⁾についての研究専門史の体系的な整理があり、本論の紙幅を大いに節約できたのである。

ここで「魯迅と日本のニーチェ」というテーマに集中したい。この研究視点が呈する「ニーチェ」は魯迅つまり当時の周樹人が実際に直面した「ニーチェ」を意味し、それはそれから人々の専門的あるいは間接的に研究する中で現れたあの「ニーチェ」と等しいとすることは決してできない。後者の介入は、往々にして「ニーチェ」に関する解読に深めると同時に、

人々の歴史の真相に対する接近を邪魔立てする。これは現在『魯迅全集』にある「ニーチェ」の注釈を見れば明白のことである。この研究視点からしても、尾上兼英の先駆的な貢献は高く評価されるべきである。

続いては伊藤虎丸(1927-2003)の仕事である。氏は『魯迅と日本人』の中で魯迅と「明治三〇年代文学との『同時代性』」⁽⁴⁰⁾という研究の枠組みを立て、「魯迅のニーチェ理解と受容」⁽⁴¹⁾をこの枠に組み込んだのである。

氏は橋川文三(1922-1983)による高山樗牛(1871-1902)についての解説や、その他の日本近代思想史研究の成果をふまえ、こうした関係の「内包」を考察し、具体的には、明治三〇年代の「ニーチェの流行」とその代表的人物として、高山樗牛、登張竹風(1873-1955)、姉崎嘲風(1873-1949)、斎藤野の人(1878-1909)、井上哲次郎(1856-1944)、桑木巖翼(前出)、長谷川天溪(1876-1940)、坪内逍遙(1859-1935)等を挙げているのだが、特に高山樗牛と登張竹風という二人との関連を重点的に提示している⁽⁴²⁾。

この研究では、魯迅は日本近代文学の影響をあまり受けていないという竹内好の観念的枠組みをこえたものであり、尾上兼英の視点からの研究をより拡大し、より具体的に指向性を備えているものである。しかし、今日見ると、その欠点も明らかである。第一に、実際の関連性、特にテキストの関連性の検討の欠如は、「同時代性」の確定的な境界を欠けている。第二に、魯迅と明治三十年代の「同時代性」を検討する一方で、魯迅と後者との関係を取り除こうとする性急さがあり、魯迅とニーチェに関するの検討を妨げている。

個人的な読書経験から言えば、劉柏青教授(1924-2016、吉林大学)の貢献にも言及しなければならない。劉は二〇世紀八〇年代の初めに、速やかにそして完全に同時期の日本の学者による中国現代文学研究の成果を中国国内に伝えた学者の一人である。1983年に彼が日本学術振興会に招かれて二ヶ月にわたって日本を訪れ、数十名の学者と交流し、書籍や論文を持ち帰り、帰国後に翻訳出版を企画し、劉中樹教授とともに吉林大学大学院において中国現代文学における「日本学」の扉を開いた。論者は伊藤虎丸の『魯迅と日本人』を当時の授業で初めて知り、手に入れた。劉柏青教授が『魯迅与日本文学』⁽⁴³⁾のなかで提示した魯迅の「進化論」「国民性」「個性主義」という三大思想と日本の明治時期の思想および文学の対応関係の構造は非常にすぐれた学術構想であり、その中に問題の指向性、すなわち「魯迅とニーチェ」の「ニーチェ」が明治の日本から来た可能性に含んでいる。

伊藤虎丸以来、少なからぬ学者は「同時代性」という枠組みの中で「ニーチェ」をさらに追跡し、彼らはより多くの日本におけるニーチェ研究の成果を借り、研究面での拡大だけでなく、具体的な問題点においてもかなり深化を実現してきた。自分の限られた読書の範囲のなかで、僭越ではあるが、評価をせずにはいられない三つの著作がある。張釗貽『魯迅：中国「温和」的尼采』(2011)⁽⁴⁴⁾、潘世聖『魯迅・明治日本・漱石』⁽⁴⁵⁾、修斌『近代中国におけるニーチェと明治日本——「近代個人主義」認識を中心に』⁽⁴⁶⁾である。その中で最も開拓的な意義を持つの

は、張釗貽の上記著書の第二章に収録された内容であり、その内容は早くも1997年に発表されている⁽⁴⁷⁾。それはニーチェの「東漸」過程における「日本の四つの道」を詳細に紹介しているだけでなく、これまでの研究より具体的に「美的生活論争」に関するテキストに触れており、その上で『『美的生活』のニーチェと魯迅のニーチェ』という非常に検討価値のある問題を提起している。潘世聖の著書はニーチェ関連論に加え、魯迅と明治日本の関係をパノラマ式に描こうとする試みであり、劉柏青の『魯迅与日本文学』の後続作と見なし得る。修斌の貢献は「個人主義」を巡って、ニーチェに触れたより多くの明治のテキストの解読を行った。以上の三者の共通点は日本の研究成果を助けとしニーチェ導入史を叙述しつつ、魯迅の初期テキストを対照して、相互の関連性を見出していることである。それらは後継者の視野を広げるための背景資料を提供すると同時に、参考になるヒントを残してくれている。それは、既成の日本におけるニーチェ導入史の整理が、魯迅の初期テキストの解析にどれだけ有効であったかということである。私の見解ではかなりの有効性を持っていると考えるが、その限界も明らかである。なぜなら魯迅の初期のテキストを「ニーチェ」名義の学史と文献史に当てはめることは、明らかに歴史の現場に存在し、かつ実際に作用し、今日に啓示をもたらす細部を犠牲にすることになるからである。

この前提の下で、本論では先に述べたように視点を「魯迅」から「周樹人」に変え、彼が当時直面した「ニーチェ」を留学生周樹人の視点で再現しようと試みた点が、おそらくこれまでの研究との最大の相違点であろう。日本のニーチェ学史は、脈絡がはっきりしており、資料がしっかりして、本論の拠るところもまた過去と同じで、前者の範囲を超えることはないものの、しかしもし「周樹人」というこの観点から見るとすれば、日本のニーチェ学史にも、おそらく何がしかの明らかな変形が生じるのではないだろうか。例えば、「ドイツ語とニーチェ」のように。

IV 変形した明治「ニーチェ導入史」

日本のニーチェ学史はおそらく「ドイツ語」からは語れないが、周樹人と「ニーチェ」について語るとなると、「ドイツ語」から語らなければならない。これは「ニーチェ」についての観察視点を「周樹人」に設定したときに起こる問題である。周作人はかつて兄と「ドイツ語本」の関係を語ったことがある。「魯迅はドイツ語を学んだが、ドイツ文学には少しも興味を持たなかった」といい、ハイネの詩集を一冊持っているだけで、ゲーテの作品は教科書で読んでいたが、重視していなかったと述べたあと、しかし、「ニーチェだけは例外で、『ツァラトウストラはこう語った』は長年本棚に保管しており、一九二〇年ごろになって、その第一篇を訳して『新潮』に発表した」⁽⁴⁸⁾と語っている。「ドイツ語」とドイツ語版の『ツァラトウストラはこう語った』との関係についていえば、周樹人とニーチェとの関係も、たいていは日本では

明治期の「ドイツ語」と「ニーチェ」の関係と重なる。いわば、一時代の教養構造が周樹人という個体に再現されている、とすることができるのである。

日本の近代における西洋学の導入は、語学の経路として、まず「蘭学」、次に「英学」、そして次に「独学」であった。ゆえに「独学」も「明治事始」の一つである。明治文化史学者である石井研堂(1865-1943)によれば、近代日本でドイツ語をはじめて学んだのは、加藤弘之(1836-1916)である⁽⁴⁹⁾。

加藤弘之は後に東京帝国大学の初代総理となり、「進化論」が東洋を席卷する時代に、日本近代の指針というべき本である『強者の権利の競争』(1983)を著した。後に楊蔭杭が中国語に翻訳し、1901年『訳書匯編』雑誌に連載し訳書匯編社から単行本を出している。周氏兄弟はともに出国前に、この訳本の読者でもあった。詳しいことは拙稿「關於『物競論』」⁽⁵⁰⁾を参照されたい。ちなみにこの本は日本語版が出る半年前に、ドイツ語版としてベルリンで出版されている。明治言説におけるドイツ語の位置づけがわかる。

「明治四年以後、本邦の医道は、獨逸流を宗とし、獨逸は学界に重きをなせるが、同十四年九月五日、帝國大文学・文二科も、自今、獨逸語を必修語とせり。元來、英語を主とし、獨佛二国語は、各自の選択に任せ、二ケ年間、二語の内一語を、兼修せしめ來れるが、ここに至りて、獨語、ますます勢ひを得たり」⁽⁵¹⁾。東京大学は1877年に開学し、1880年「法、理、文」の三学部を設置した。「『これ迄、英語演説会は、東京大学三学部を始め、間々各所に行はれたりしが、獨逸語演説会に至ては、未だ曾て行はれず、識者の遺憾とする所なりしが、聞く所に拠れば、今般、医学部生徒が打寄りて、獨逸語演説会なる者を設け、已に第一第二の会を開き、爾後毎月二回程づゝ、開回の目的なりといふ。追々には、意味を以て本を読む読書者流がなくなりませう』明治十三年夏発行[中外医事新報]第九號」⁽⁵²⁾

これと同時に、「ドイツ語」あるいはドイツ学が日本の近代哲学の構築に参与した。西周(1829-1897)が「哲学」の二文字でもって「philosophy」⁽⁵³⁾を翻訳し、「進化論の言葉で、大事な言葉は、大分加藤博士で定まりました」⁽⁵⁴⁾としたのに続いて、明治十四(1881)年『哲学字匯』が出版されたことで、明治における近代哲学の体系的な構築が始まった。これは史家が言う「哲学攻究の始め」⁽⁵⁵⁾である。

「医学から文学へ」、周樹人が仙台を離れ東京に戻ってから入った「獨逸語專修学校」の母体である「獨逸学協会」も、上述の『哲学字匯』が出版され、哲学界が「ドイツ流に転向し始めた」明治十四年すなわち1881年9月に成立した。協会の構成員は、上は皇族から下は平民に至るまで約二百名。前述した「西周」、「加藤弘之」らは当然主要な発起人の顔ぶれにあった。その趣旨は「英米佛の自由主義をおさへ、堅實なる君主國日本の將來を築く爲に獨逸の法律政治の学問を取入れ」⁽⁵⁶⁾にあった。これによって史家の言うことが裏付けられている。そしてドイツの学制をまねて、「獨逸学協会学校」(Die Schule des Vereins Fur deutsche

Wissenschaften) の創設は、その後の「独逸学協会」の主要な「事業の一つ」⁽⁵⁷⁾であった。「独逸学協会学校」がドイツ語とドイツ学を普及させた成果は顕著であり、前期には「国家体制に対する整備」に「直接効果」があり、後期には「教養主義の語学教育」⁽⁵⁸⁾に重要な役割を果たした。

「ニーチェ」はこのような「ドイツ系」を背景とする歴史の下で渡ってきたのである。周知のように、ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) は1844年に生まれ、1900年に歿し、1872年に『悲劇の之誕生』を出版してから、1889年に発狂するまで、十六、七年間、主要な著述活動を続けていた。彼が広く世界に知られるようになったのは、ほとんど気が触れて以後に著作の再版と評論の増加にともなうものである。したがって、ニーチェの著述活動と彼が名を上げた過程は、明治期 (1867-1912) のほぼ全体と時間的に重なり、後者と「同時代性」をもっているとも言える。

ニーチェが明治日本に入ってきた経路については、研究史によれば、主に四つあり⁽⁵⁹⁾、張鉞もこれについて詳しく紹介しているので⁽⁶⁰⁾、ここでは重ねて述べない。そのなかでもっとも重要な経路が東京大学哲学科である。

すでに述べたように、一八八〇年代からの日本哲学界の関心は「完全にドイツのみに限定されていた」とすれば、その担い手は東大哲学科、すなわち官学であった。日本の学者はニーチェの導入史を述べる際に、桑木巖翼の『ニーチェ氏倫理説一斑』緒言の回顧を多く引用し、基本的にドイツ人教授ラファエル・ケーベル (Raphael von Köber, 1848-1923) による授業 (時期としてはおおよそ1895、6年前後) を明治「ニーチェ」の祖述とし、東京大学が当時のニーチェ伝播の中心であったことに異議はない⁽⁶¹⁾。ケーベルは1893年6月に来日し、主にハルトマン (Karl Robert Eduard von Hartmann, 1842-1906) とショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) とともに、神学と宗教研究の必要性を日本の学界に力説した⁽⁶²⁾。桑木巖翼によれば、彼の同級生の中にはニーチェに関する論文を書き始めた者がいた⁽⁶³⁾。明治三十四年すなわち1901年、つまりニーチェが亡くなった翌年、日本ではニーチェ・ブームが起こった。そのシンボルマークは論争とニーチェに関する二冊の専門書の出版であった。その論争とは「美的生活論争」のことで、高山樗牛の「文明批評家としての文学者」⁽⁶⁴⁾と、「美的生活を論ず」⁽⁶⁵⁾という二つの文章に触発されたのである。この後、この論争に巻き込まれ、なおかつ「発動者」でもある高山樗牛の側に立った主要な論争者は登張竹風と姉崎嘲風であったが、この三者の延長線上に、のちに高山の死後も「個人主義」を唱えつづけた斎藤野の人がいた。この四人のうち、樗牛と嘲風の二人は東京大学哲学科の同期生で明治二十九年 (1896) 卒業した。竹風と野の人の二人は東京大学「独逸文学専修」すなわちドイツ文学専攻、竹風は明治三十年 (1897) に、野の人はやや遅く明治三十六年 (1903) に卒業した⁽⁶⁶⁾。二冊の専門書とは、一冊が登張竹風著の『ニイチェと二詩人』⁽⁶⁷⁾で、もう一冊が桑木巖翼著の、既に紹介した『ニーチェ氏倫理説一斑』である。桑木巖翼のニーチェに対する態度はずいぶん違っていた

が、高山樗牛や姉崎嘲風と同じ東大哲学科の出で、しかも同級生であった⁽⁶⁸⁾。これはつまり、いわゆる明治の「ニーチェ・ブーム」とは、ある意味、東大哲学科やドイツ文学科出身のエリートたちが、授業中に出会った「ニーチェ」を社会の大舞台に投げかけ、世間の注目を集めた結果でもある。彼らは「ドイツ語」を通じて明治日本に「ニーチェ」を直送し、一時代をリードする自らの「ニーチェ」に関する言説を構築したのである。彼らは明治の近代国家教育体制下の「受益者」であるものの、彼らが世に問うた「ニーチェ」には明らかに明治国家体制に挑戦するエネルギーが蓄積されている。彼らは、これまで自分たちが身を委ねてきた「所与の現実」——日増しに強固となり強大化になってきた明治国家日本——に、「ニーチェ」を借りて、個人の自由、つまり異国の他者の「個人」を借りて、ローカルな「個人」の空間を拡げていこうとしたといってもいいかもしれない。これこそが、あの時代の「二律背反」であったのかも知れない。

話題を周樹人へ移そう。桑木巖翼の『ニーチェ氏倫理説一斑』は、周樹人が「ニーチェ」に近づいた教科書であることが実証的に明らかになったが、ではもう一冊、すなわち登張竹風の『ニイチイと二詩人』はどうであったか。伊藤虎丸の研究を借りれば、「たとえば、登張竹風が『フリードリヒ・ニイチエを論ず』（『帝国文学』明治三四年六月～十一月に連載）でニーチェを借りて叫ぶ十九世紀物質文明への批判、反国家主義、反道徳主義、反科学主義、反実利主義、反民主主義は、魯迅の当時の諸評論の中にそのまま見出されるものである。さきに斎藤野の人と魯迅との共通性として指摘したことは、ここではほぼすべてそのまま、竹風と魯迅におけるニーチェ魯迅の影響の共有といいかえることも出来る。確かに魯迅は、十九世紀文明の批判者というニーチェ像を留学当時の日本文学で共有していたのである」⁽⁶⁹⁾とある。これをふまえて、張釗貽は再度登張竹風の当該テキストを深く検読し、両者の間には影響と受容の関係が存在するという結論を一層明らかにした。しかし、先達の研究における結論の影響が大きすぎたのか、張は許寿裳が『亡友魯迅印象記』において提示した弘文学院時期に「魯迅が有した『ニーチェ伝』は登張竹風の『フリードリヒ・ニイチエ』がおさめられている『ニイチイと二詩人』にちがいない」と考え、「魯迅」が桑木巖翼の一冊を読んだ可能性を排除した。私の当初の予想も張釗貽と完全に同じであり、ほぼ桑木巖翼を考えの外に出していた。そして別に排除の理由もあった、すなわち桑木巖翼には高山樗牛や登張竹風のようなニーチェに対する「共感」と「熱情」を欠いている以上⁽⁷⁰⁾、高山樗牛、登張竹風と意気投合した「魯迅」には重んじられないのではないかという史家の言説に影響されていた。これは私がずっと後になってようやくこの「桑木巖翼」を探しあてた理由である。今見れば、徹底的に修正すべきである、すなわち留学生周樹人には二種類の「ニーチェ伝」があっただけでなく、どちらも読んでおり、読んでいただけでなく「ニーチェ」と関連する部分を全訳したり、大意を抜粋したりして、両書の内容を自分の文章に組み入れ、雑誌『新生』（創刊に失敗して雑誌『河南』に投稿）のために長文をひねり出すのと同時に、自分の言説をも構築したのである、と。

東京大学という学校システムが周樹人のために「ニーチェ」に関する主要な知識のプラットフォームを作ったといえる。彼はこの足場を借りて弟の周作人が目撃したあのドイツ語の原書『ツァラトウストラはこう語った』を齧っただろう。当時の弘文学院のカリキュラムによると、第一、二学年の清国留学生たちの「外国語」の授業は「日本語」のみで、第三学年になって「英語」が開設された⁽⁷¹⁾。『魯迅年譜』によれば、弘文学院入学から卒業までの二年間（1902年4月30日-1904年4月30日）⁽⁷²⁾、周樹人は日本語以外の外国語の授業を受けていない。本格的にドイツ語を学んだのは、仙台医学専門学校に入学した1904年9月からである。仙台で一年半学んで「医学から文学へ」転向し、1906年3月に仙台を離れて再度東京へ戻った。『魯迅年譜』に拠れば、6月「東京独逸語協会が設置するドイツ語学校に学籍を入れる。仙台医専で学んだことに加えて、ドイツ語を活用して各国の作品を読み、翻訳する」⁽⁷³⁾という。「ドイツ語学校」とは、前述のとおり「独逸語専修学校」である。つまり、周樹人がドイツ語と接触したのは、『河南』に掲載された論文を執筆するまでに、前後およそ三年あまりの時間があつた——それらの文章を準備する点から起算すれば、ドイツ語に触れた時間はもっと短いのではないか。その程度はどうであったか。現存する仙台医学専門学校第一学年の成績表によれば、医学生として外国語である「独逸学」（すなわちドイツ語）の場合、周樹人は2学期とも60点であり、全学年の平均成績も60点であった⁽⁷⁴⁾。ここから推測すると、周樹人のドイツ語のレベルは、『域外小説集』（1909）に収められたあのいくつかのドイツ語を源とする作品を翻訳するに至るまで、飛躍的な向上があつたと言えよう。

魯迅訳アンドレエフの「黙」と「謾」、ガールシンの「四日」はドイツ語訳を対照して読んだことがあるが、一字一字が忠実で、きちんとしていて、添削の弊がなく、実に訳界に新時代を切り開く記念碑であると思ひ、非常に興奮した⁽⁷⁵⁾。

許寿裳の上記のくだりは周樹人のこの間の学習効果を実証している。周樹人の独逸語専修学校での学習状況について、本論は完全に北岡正子の「独逸語専修学校に学んだ魯迅」⁽⁷⁶⁾による綿密かつ詳細な調査を根拠としている。仙台を離れ東京へ戻ってほどなく、「魯迅」は途中で入学し、1909年6月の帰国前（8月に出立）までに、「独逸語専修学校」に7学期間在籍し、そのうち「普通科」のほか、「少なくとも三学期間は高等科で学べ」、高等科で使用した教材の中には「彼が傾倒したイブセンやケルナーの作品」があり、タイミングがよければ、山口小太郎（1867-1917）が「Nietsche」の“Also sprach Zarathustra”に関する講義を拝聴していたかも知れない。さらに重要なことは、在學生全員がドイツ語修習者の必読書である「三太郎文典」（大村仁太郎、山口小太郎、谷口秀太郎の三教授が編纂した『独逸文法教科書』などの当時のドイツ語教材）の訓練を受けていることである。これによって、「魯迅のドイツ語能力の基礎は、独逸語専修学校での学習によって培われ、『文芸運動』推進の力となつた」⁽⁷⁷⁾と結論づけられている。この結論は信頼できるものの、もし周作人の思い出の中で前述を考慮するの

であれば、多少「割引」できるかも知れない。なぜなら上述の状況は完全に出席した場合に限り百パーセントになることが可能だが、周作人が見るところ彼の兄は『『独逸語学協会』附設の学校に名を連ねて、気が向いたときに何回か講義に行く』⁽⁷⁸⁾ということなので、その出席率は、「七学期間少くとも除名にならぬ程度」⁽⁷⁹⁾として推測しても妥当であろう。しかしこの「出席率」の「ワリビキ」を提示することは慎重さからであって、それがどれほどの割引であって、周樹人がその他の時間の自習と実践を通して獲得したドイツ語の読解能力の高さは否定できない。

話の筋はやはり「独逸語」と「ニーチェ」へと戻ってくる。もし周樹人のドイツ語と日本語の水準について総合的に評価すれば、今風に「達人」と呼ばれることになるが、ドイツ語がどんなに上手でも、彼の日本語の把握と応用力に勝るものはなく、周樹人が教育を受けた環境にも合致しているのである。「ニーチェ」に接近することについてのみいえば、周樹人が日本語とドイツ語の二種類の言語の通路を持っていたとして、明らかに日本語が主でドイツ語が従である。周樹人が直面する「ニーチェ」は、二つの言語の鏡像から多く現れるのは、日本語というフィルターを通して屈折してくる「ニーチェ」であろう。周樹人は自身のテキストを書くために、「ニーチェ」に対して行っていた採集がこの図形の中にあるに違いない。

V 丸善書店と「ニーチェ」

以上は明治のドイツ語教育の背景と「ニーチェ」との関係について述べたもので、周樹人が当時少なくとも三種類の「ニーチェ」に関係する著作を読んでいたか所有していたことがわかった。そこで、書籍の購入にも目を向けてみよう。登張竹風『ニイチェと二詩人』は35銭、桑木巖翼『ニーチェ氏倫理説一斑』は50銭で、独逸語専修学校の授業料が月額1元(100銭)であったため、当時の学生にとっては高価な買物であったと言える。もう一冊のドイツ語版『ツァラトストラはこう語る』の値段は、今のところわからないが、輸入原書だからもっと高く売れるはずであろう。周樹人の生活は儉約であったが、よく金を払って本を買ったのは、明治期の「書生気質」にも合致していたのであろう。

『ツァラトストラはこう語る』のドイツ語の原書の購入を語れば、丸善を抜きにしては語れない。周作人は回想のなかで言及していないが、十中八九は間違いのないであろう。続けて、その関連性を検証してみる。丸善は明治期の洋書直売の専門店であり、魯迅は「周樹人」としての留学時代から「魯迅」としての晩年までずっとこの書店と関係を持っていた。全集には、「丸善」に頼んで本を買ったという記述が多く、手紙や日記、帳簿などの記録を加えれば、「丸善」は百カ所以上もある。したがって、「丸善」も周樹人の周辺の「ニーチェ」と交差し、無視できない事項である。しかしここでは視点を切り替えて、まず自国の「明治書生」たちにとって「丸善」はどのようなものであったかを見てみよう。

十九世紀の歐州大陸の澎湃とした思想は、丸善の二階を透して、この極東の一孤島にも絶えず微かに波打ちつゝあつたのであつた。

丸善の二階、あの狭い薄暗い二階、色の白い足のわるい莞爾した番頭、埃だらけの棚、理科の書と案内記と文学書類と一緒に並んでゐる硝子の中、それでもその二階には、その時々々に歐州を動かした名高い書籍がやつて来て並べて置かれた。

……（中略）……

ゾラのあの強いナチュラリズム、イプセンのあの深い象徴を透して見た人生、ニーチェの強い大きな獅子吼、トルストイの血と肉、『親々と子供』の中にあらはれた Nihilism、ハイゼの女性研究、……（中略）……極東の一孤島の新しい處女地には、いつ蒔かれるともなくその種は蒔かれて行つた。

注文した『親々と子供』の一冊を抱いて、戀人にでも逢つたようにして、丸の内の宮城近い路を歩いて行く青年もあれば、『アンナ・カレニナ』の丸善の二階の書棚に並んでゐるのを見て、一月の小遣錢しかない財布を逆さにして、喜んでそれを買つて行く若者などもあつた。アルフロンス・ドオデエの明るい同情に富んだ藝術、ピエル・ロチのインプレツシヨニズム、アメリカの作者では、カリホルニアの詩人プレット・ハートの鑛山を詩材にした短篇などがよくさういふ人達に讀まれた。

バルザックの藝術もかなり人々に讀まれた。『ペリ・ゴリオ』『ユーゼネ・グラント』などの安い本を若い文学書生はよく手にして歩いた。

ドイツでは、パウル・ハイゼ、ゴットフリート・ケルレルのものなどが讀まれた。ニイチエやイプセンとの入つて來たのは、それから少し後だが、紅葉の病死の頃には、ハウプトマン、ズウデルマンの名もいくらかわが文壇の若い人達の口に上つてゐた。

兎に角、この歐州大陸の大きな思潮の入つて來た形は面白かつた。三千年來の島國根性、武士道と儒学、佛教と迷信、義理と人情、屈辱的犠牲と忍耐、妥協と社交との小平和の世界、さういふ中に、ニイチエの獅子吼、イプセンの反抗、トルストイの自我、ゾラの解剖が入つて來たさまは偉觀であつた⁽⁸⁰⁾。

これは明治の有名な小説家である田山花袋（1872～1950）が、後に「丸善の二階」という題目で、丸善と「私」について回想したものである。丸善の「あの狭い薄暗い二階」から、「三千年來の島國根性」を揺るがしてきた「十九世紀の歐州大陸の澎湃とした思想」や「ニイチエの強い大きな獅子吼」などが、如何にして日本全国に浸透してきたのかをはっきりと呈している。

もう一人、新聞記者として世相を記録した随筆家の生方敏郎（1882～1969）は、周兄弟と同世代であるだけでなく、ほぼ同時期に東京で「書生」をしていたという、極めて似たような経歴をもっており、「洋書」と「丸善」についても回想している。「勿論日本風の店だった。畳が

敷いてあって番頭さんが火鉢を抱えて坐っていた」や⁽⁸¹⁾、「二階は西洋風に本棚に書物が沢山並べてあった。そこで偶然にも第一に私の眼を引きつけたものは、小型の青い表紙へ赤く My Religion と刷ったトルストイの著書だった」⁽⁸²⁾と取り上げている。生方敏郎はこの後トルストイ好きとして知られるが、実に彼は西洋に心を動かされ、新しい知を求めようとする「書生」が、丸善で自分の好きな原書を見つけることができるという事実を証言したにすぎない。

周樹人、周作人はそれぞれ1902年、1906年に相次いで東京にやって来て、兄弟二人は少なくとも「丸善の二階」で同時代の明治の青年と合流することになり、異国思潮の洗礼を受けた。

周氏兄弟は知識を渴望し、丸善に相当な満足感を得ていたので、一旦途切れると、強烈な精神的不調をきたした。例えば、1911年5月、周作人の帰国をうながして東京に戻ってきた周樹人が、約二年ぶりに丸善に入ったときには、全身の居心地の悪さを感じた。東京に「半月にして」、「友人一人訪ねず、また遊覧もせず、ただ丸善に陳列する本を見ただけです。みな所蔵のものではなく、欲しいのは山ほどありましたが、ついにきっぱり一冊も買いませんでした。越中に蟄居し、清新の気に久しく接しないと、二年もたたぬのにもう村野老です。自ら悲しむにも足りませんが」⁽⁸³⁾と当時の様子を書簡に記している。周作人は丸善との絆は兄に負けないが、表現は穏やかで兄ほど激しいものではない。彼は「東京の思い出」シリーズの散文の中で「東京の書店」という作品があり、その中の大半は「丸善の思い出」である。

東京の本屋といえば第一に思い出すのは何と言っても丸善 (Maruzen) である。その本名は丸善株式会社で、翻訳してみると此は丸善有限公司である。我々にとって関係するのは其の実唯書籍部の部分だけである。最初は個人の開いた店で丸屋善七といったが此の店は私は見た事がない。一九〇六年初めて見たのは日本橋通三丁目の丸善で、床板は敷いてあった旧式の建物だった。民国以後火事になって再建して、民国八年 (一九一八) 東京に往った時行って見たらもう洋館になってゐた。その後大地震で全焼して、一昨年再び行ったら洋館がやはり元の場所に建ってゐたが、地名は変わって日本橋通二丁目となった。私が丸善で本を買うのは前後もう三十年になるから、取引はほんの僅少なのだが老顧客との方といへよう。先々和書と中国の古本とを買い度いだが、懐がうまくゆかない。けれども此の少しづつの洋書が却って私には極めて大きな影響があるので、丸善は一法人ではあるが、私にはしかし師友の誼あるものとへえるのである。

私が一九〇六年八月東京に往って丸善で買った最初の本は聖茲伯利 Saintsbury の「英文学小史」A Short History of English Literature 一冊と泰納 Taine の英訳本四冊であった。書架には今でもまだこの二部はあるが、しかもうその時買った元の本ではなくなっている⁽⁸⁴⁾。

周作人は冒頭で三十年来の「老顧客」としてさわやかに自分の「丸善」について語ったのである。ただ、ここで付け加えておきたいのは、一生忘れ難い最初の丸善での購入は、「兄 (大

哥)」が連れていってくれたに違いない。東京に着いたとき、周樹人と許寿裳はすでに丸善の「老顧客」で、しかも田山花袋が先に記した「小遣錢を全て叩い」た学生と同じように、「懐にお金さえあれば、『賭けも辞さなく』、しばしば懐を空っぽにして帰って、『また貧乏になってしまった』と嘆いた」⁽⁸⁵⁾というほど本を買っていたからである。その時から周作人は、おそらくこのような慨嘆とともに、二人の「留学の先輩」とともに丸善への道を歩んでいたであろう。

人は恋愛の経験に於て、特に初恋は忘れ難い気持があるが、他の事柄でも亦恐らく此の通りであらう。最初の印象は非常に重要なものである。丸善の店の様子も数度の改変を経たが、私の覚えてゐるのはやはりあの最初の古い建物である。二階は決して大して広い方でなく、四壁書架で中間の沢山の長い卓子の上には新着の本を並べてあって、客が自由に繙いて見るに任せてある。時に角にあるのが書架の後に落ちるような事があると、半日探しても本が見つからない事がある。一、二冊の本を選んで勘定して貰はうとしても一寸人が見つからないので、どうしても大声で店員を呼ばねばならない。もし誰かゝても仲々埒が明かないと下田君が自らやって来て応待してくれた。こんな大して客を監視しない態度は一種愉快なのだが。後に改築してからもやはり同様であったが、私の思ひ出すのはどうしても元の様子である⁽⁸⁶⁾。

この模様は、田山花袋や生方敏郎が記した「丸善」に関する記憶の見事な裏付けとなっている。いわば同じ時代に、共通の「丸善」を持っていたのである。本と書店の関連度について言うと、周作人はこの3500字に満たないエッセイの中で、34人の作者と24四種もの著書に及んで、このうち24人と15著書が丸善と直接関連している。これらは彼の留学時代の読書体験の一部であり、兄と共訳した『域外小説集』のような著作活動にも浸透していたのである。これだけでなく、周作人はこれらの本の啓蒙的な意義、例えばエリスの『性の心理の研究』7冊についても言及し、「これを読んで目の中の鱗がたちまちにして落ち、人生と社会について一つの見解を打ち立てたのである」⁽⁸⁷⁾と述べた。このような詳細な記述は、丸善に関する読書人の回想録にはほとんど見られない。丸善がこの当時の日本語版⁽⁸⁸⁾をただちに保存し、後の『丸善百年史』の一部⁽⁸⁹⁾にしたのも無理はない。

しかしこれは、丸善という書店との関係というよりも、彼らが丸善を通して構成してきた新しい知識と時代思潮との関連を表している。田山花袋と周作人の回想はすべてそれぞれ同じあるいは異なる側面から、周樹人が「ニーチェ」に関わる傍証を提供した。前者からもわかるように、「ニーチェの獅子吼」は「丸善の二階」から伝わったもので、周樹人はその咆哮をたよりにドイツ語版『ツァラトストラはこう語る』を手に入れたのであった。これに生方敏郎を加えると、三者の回想の相互参照から、「ニーチェ」は孤立していないことがわかる。「ニーチェ」をある円心としたならば、この「ニーチェ」には、ゾラ、イブセン、トルストイ、ハイ

ぜ、さらにバルザック、ハルトマンとゾーデルマンや英国の小品文作家、及びいわゆる大陸文学の中の弱小民族文学作家という大きな周辺があり、その人たちの解説者として、もう一人ブランドスが付き添っていた。彼らはみな「ニーチェ」と切り離せない関連要素であり、「ニーチェ」に関するほとんどの文脈において「ニーチェ」とともに登場する。周樹人がその後に構築したテクストに見られるように、「ニーチェ」を一個の観察対象として見ても、自分の周辺からはぎ取られたことがないのもそのためである。「ニーチェ」に「周辺」を持たせることは「明治」という時代に「ニーチェ」に与えられた一つの存在形態であった。つまりこの「ニーチェ」の時代像は周樹人自身のテクストの中にしっかりと取り込まれているのである。

Ⅵ 何を争っているのか——ニーチェショックの余波

しかし、日本語にしろ、ドイツ語にしろ、丸善書店にしろ、結局はまだすべて「ニーチェ」が周樹人の周辺に浸透する環あるいはルートにすぎない。それでは何が「ニーチェ」をして一つの点あるいは一つの円心に際立たせて、周樹人の注意を引いたのであろうか。

多くの論者が、高山樗牛をはじめとする「美的生活論争」に言及する。私はこの点には同意するものの、一つここではっきりさせておくべきことがある。それはこの論争が1901年、周樹人が日本に到着する前年に起こったことであり、到着後の1902年にはこの論争のクライマックスはすでに過ぎ、同年12月24日リーダー格の高山樗牛本人が肺病で死去したことで、論争は事実上終結したのである。つまり、この論争が周樹人のニーチェへの関心を促進させたことにつながっているとしても、それは論争そのものによるものではなく、むしろこの論争がもたらした余波によるものだけということである。事実上、この「ニーチェ」の名の下ではない「ニーチェ」をめぐる論争は、日本の文芸界、思想界、ひいては読書会全体に巨大な「ニーチェ」の衝撃を作り上げ、そして「ニーチェ」を社会各界、とりわけ青年学生の中に広範な普及と浸透もたらしたのである。周樹人の「ニーチェ」への関心も、このような広範な社会浸透の結果であるはずである。むしろ、周樹人がニーチェを読み進めるにつれて、彼はそれらの論争の中の記事を捜し求め、そのために彼が日本留学に滞在する前の論争の現場に連れ戻されたのではないかと推測していくのに差し支えないものであろう。

「美的生活論争」の過程についての紹介や解説は、基本文献が充実しており、史実も整理されており⁽⁹⁰⁾、最初から述べるまでもないものの、ここではただ一つの、「ニーチェ」に関する論争は、何を争っているのか、という問題を提起したい。

「ニーチェ」は、登場当初から理解の混乱を伴っているといってもいいであろう。例えば、「ニーチェ」についての最初の文章では、「ニーチェ」と「トルストイ」を同列に論じている⁽⁹¹⁾(1893-94)。これはのちの史家の目には、両者はほとんど関係がないものであったが⁽⁹²⁾、その後かなり長くつづいた「トルストイとニーチェ」の言説構造の手本⁽⁹³⁾となった。このよ

うなあり様は、先に述べた劉半農の「托尼文章、魏晉風骨」という題辞にみられるだけでなく、後の魯迅のテキストにも「人道主義と個人主義という二つの思想の起伏消長」⁽⁹⁴⁾を自称しているところにもみられる。

例えば、加藤弘之『強者之權利之競争』のドイツ語版がベルリンで出版された後、西欧の評論界に酷評され、彼は納得せず文書を書いて自分の多くの観点はオリジナルと主張しているところに、ある人はすぐに出てきて文章(1896)を発表し、君は「権利」とか「国家」とか、さらに「非愛説」を主張しているのではない、あっちにはニーチェという人がすでにそう言っている⁽⁹⁵⁾と、彼に教えてあげているのである。

文豪森鷗外(1862-1922)でさえも、同じ困惑に遭遇していた。当時彼はハルトマン(Eduard von Hartmann 1842-1906)を熱心に紹介していたので、この突然の「ニーチェ」に対しては、あまり認めなかった。それを比べてみると、「ニイチェなどの立言は殆哲学とはいはれぬ位であろう。それであるからハルトマンの審美学は、特にその形而上門の偉觀をなすのみでなく、その單一問題に至っても目下最も完備して居るのだ」⁽⁹⁶⁾とある。

また、「ニーチェ」に真っ先に注目したのが宗教界、具体的に佛教界である。「ニーチェ」が佛教界の精神を活性化させることを期待して書いた文(1898)⁽⁹⁷⁾に続いて、佛教界のあるものは、「美的生活論争」の中に登場する「ニーチェ」に真剣に注目するようになったが、結局これは強者の声ではなく、明らかに「羸弱思想の流行」(1902)⁽⁹⁸⁾と失望した。むろん、このような混乱があっても不思議ではない。西洋のニーチェ本家においても、ニーチェの理解はかなり混乱しているからである。日本では上で紹介したように、「ニーチェとトルストイというおおよそ親縁性のない二精神を並べて論じている」時に、ベルリンの劇場ではニーチェを諷刺する戯曲『善悪の彼岸』が上演されていたという⁽⁹⁹⁾。

しかし、これらの混乱と別に、この「ニーチェ」をめぐる議論の焦点は、実は「ニーチェ」を受け入れるかどうかという問題になっているのではないかと私は考えている。具体的には、「ニーチェ」の「個人主義」の捉え方の問題である。受容を主張するものは「ニーチェ」の「個人主義」がいかにかすばらしく、必要であるかを強調するのに対し、受容に反対するものも、「ニーチェ」の「個人主義」に向かって、この人とこの「主義」がいかにか悪いかを語り、その最大の理由として「ニーチェ」の「個人主義」は利己主義と等しいと決めつけるのである。さらに興味深いのは反論者の「ニーチェ」についての理解の多くは、「ニーチェ」の支持者や擁護者たちの紹介から取ってきたものである。つまり「ニーチェ」の提唱者は反対者に「個人主義」を考え理解するよう促す思想的材料を与えたのである。このことは坪内逍遙の反撃文『馬骨人言』にも明らかである⁽¹⁰⁰⁾。

ここで注目すべき点は二つあるが、一つは、ニーチェを導入した主流の中に、最初から「ニーチェの個人主義」に対する相違があり、それが最後まで続いたことである。その最たる例は、すでに紹介した東大で哲学を教えていたドイツ人ケーベル自身が、ニーチェを嫌い、当

時の学生であった桑木巖翼は卒業して六、七年後に、「帝国大学でケーベル教師が哲学史を講ぜられた時、ニーチェの哲学というのを講ぜられて、その文章は巧妙であるけれども、その説は極端な利己主義で、排斥すべきものであるといわれた」ことを記憶している。ケーベルの教えは、桑木巖翼の著作にも影響を与えている。ケーベルと同じ時期に東大で哲学を教え、『哲学字彙』を編纂した井上哲次郎も同じ考えの持ち主である。彼は『哲学評論』(1901)の中で、「利己主義の道徳的価値」について論じる時に、シュテイルナーとニーチェを例にあげて、この二人がともに「一己を中心とし、一切自飽を材料とせんと欲する極端の利己主義を鼓吹せり」⁽¹⁰¹⁾と激しく批判している。

もう一つは「ニーチェ」の「美的生活論争」の中で、日本の思想界、精神界において演じた役割である。

いかに「ニーチェ」をめぐる意見の相違があろうと、「ニーチェ」が演じていたのは、哲学的な役割でもなく、文学的な役割でもなく、完全な倫理的な役割である。桑木巖翼の『ニーチェ氏倫理説一斑』というタイトルから、当時の日本における「ニーチェ」の置かれた状況がわかる。「ニーチェ」をまず倫理問題として扱うのはその時代の特徴で、明治時代ほど「倫理が強調された」時代はない。この点は生方敏郎の「その時分の学生は、宗教問題、倫理問題に没頭していた。…(中略)…時代精神と言おうか、の流行り物だった」⁽¹⁰²⁾という世相に関する記述にも裏付けられている。

明治時代の日本の倫理体系は近代国家の整備とともに作られた。1890年に公布された『教育勅語』は、實際上この倫理体系を指導する綱領的な文章であり、その中核は国民に無条件に天皇制国家に忠誠を誓うことを要求するものであった。この倫理体系は日本の近代化に大きな凝集力を発揮した。1894-95年の「日清戦争」の勝利は、日本全国を狂喜させ、国家体制を一層強化させると同時に、人々の注意を戦前のいわゆる国家理想から、より多くの物質的利益に向けさせていったのである。これは正に高山樗牛が「日本主義」と「時代精神」の鼓吹から、「個人主義」と「本能主義」へと転換した背景と重なるものである。

彼は、これまで全面的に支持し、賛美していたこの明治国家より、日増しに物質化する環境に巨大な圧力を感じはじめ、「文明批評家としての文学者」という身分で、現実の体制と文明の批判に身を投じ、「個人の本能」を強調して「美的生活」を力説することによって、日に日に強化される国家体制と物質環境のもとで、個人の自由と個人の精神的空間を確保しようとしている。この意味で、「ニーチェ」は彼にとって学問ではなく方法であり、「ニーチェ」によって精神革命の契機をつくらうとしたのである。これは彼と彼の同級生である桑木巖翼との大きな違いである。

しかしながら、彼は「本能主義」を媒介として、「本能主義」的生活観と人生観を過度に強調していたので、彼が「個人主義」を主張する高尚な動機は、現実生活の倫理レベルに戻るざるを得なく、いわゆる「道学先生」たちの攻撃に直面しなければならなくなるのである。

登張竹風が現れ、高山樗牛のために「ニーチェ」を持ち出して、「吾等の見る所を以てせば、高山君の「美的生活論」は、明らかにニイチエの説にその根據を有」し、「高山君の美的生活論を解せむと思はむ者は、またニイチエの個人主義を解せざるべからず」⁽¹⁰³⁾と弁解しようとするが、「結果的にはのちのニーチェ解釈、または樗牛解釈に、樗牛——ニーチェなる誤解を生む端緒となってしまった」⁽¹⁰⁴⁾という逆効果となり、世間の人々が高山樗牛に対する誤解を深めることになるだけでなく、この種の誤解を「ニーチェ」の身の上にも及ぼし、登張竹風自身にも及ぼすこととなった。

しかしそれは、根本的には、ニーチェの鼓吹者が作りあげたニーチェ像の限界によるものである。杉田弘子氏の研究が明示しているように、彼らの「ニーチェ」は「ドイツ語」を通して直接入ってきたにもかかわらず、本当のニーチェの原書に触れることは限られており、主にドイツ語文献の中のニーチェに対する評論を借りて「ニーチェ」を形作ったのである⁽¹⁰⁵⁾。この「ニーチェ」に不完全さと歪みがあるのは言うまでもないことである。

そこで、この「ニーチェ」に対する総攻撃が展開された。主に道徳的な側面、つまり攻撃者たちは「個人主義」すなわち「利己主義」の「ニーチェ」を受け入れることができなかった。「ニーチェ」が排斥される最大の理由がここにある。「道学先生たち」は、反キリスト教的な「ニーチェ」を、「文明批評家」としての「ニーチェ」を恐れていなかったようである。なぜなら国家体制にとっての最大の脅威は、この倫理道徳上の「個人主義的利己主義」であるからである。

批判者は擁護者よりも「ニーチェ」そのものを理解していない。批判者の中にドイツ語を知っている者はほとんどいなくて、せいぜい英語で「ニーチェ」を読むだけで、甚だしき者に至っては英文訳さえも読まず、ただ擁護者の文章における「ニーチェ」を読んだだけであった。しかし彼らは「本能」を痛罵すると同時に「高山たち」が何を言おうとしているかを本能的に知っており、まして齋藤野の人は「国家と詩人」(1903)という文の中に、「詩人」(個人)が「国家」の前提であり、「詩人」(個人)が「国家」のために存在するものではなく、「国家」が「詩人」(個人)のために存在するのであって、「詩人(個人)」なしに「国家」とは意味がないことである、といったような意思を明白に伝えている⁽¹⁰⁶⁾。

この論理に従えば、国家への絶対的な服従を要求してきた明治の倫理体系が徹底的に揺らいでしまうことが明らかであった。夏目漱石(1867-1916)が12年後の1915年に「私の個人主義」⁽¹⁰⁷⁾を控えめに、温和に発表したことを知れば、樗牛・野の人兄弟及びその支持者たちの攻撃の大きさは想像に難くない。そこで、すさまじい反撃が始まった。坪内逍遙は『馬骨人言』で長編連載に出馬し、「高山たち」に文壇の老将を存分に味寄せたものの、本来彼らと同戦線にいるはずの文学者たちも、「ニーチェ」に対する誤解によって、攻めたてたのである。例えば、与謝野鉄幹(1873-1935)のように、この「ニーチェ」のために『明星』雑誌に、かつて

特集文を寄稿し有力に支持していた高山樗牛を痛烈に批判し始めたのである⁽¹⁰⁸⁾。当時の日本の主流知識人のほとんどは、「個人主義的利己主義」と解釈されていた「ニーチェ」を警戒していたといっても過言ではない。

明治三十五年すなわち1902年の初め、丸善では「知識人総動員」と言うべきアンケートを企画し、70人以上の有識者に「19世紀の大著述」を選んでもらい、その結果を雑誌『学鏡』3月号に掲載した。ダーウィンの『種の起源』が32票でもっとも多く、ニーチェは3票でもっとも低かったが、その中には高山樗牛の一票も含まれていた。そしてこの結果に、当然、樗牛は「意外」を感じた⁽¹⁰⁹⁾。

この事件は体制内の「ニーチェ」に対する評価を反映しており、現実における「ニーチェ」の苦境を示すに十分であった。しかもこの苦境は精神的であるだけでなく、更に物質的で、更に口頭だけではなく、しかも更に人事的である。

樗牛は夭折し、周樹人が日本に留学していた1902年末に肺病で亡くなった。しかし、彼はそれ以前に、十九世紀のニーチェから、十三世紀の僧侶日蓮上人(1222-1282)のもとに心を寄せていた。そしてこの瞬間、橋川文三の言によれば、「『未来の権利』たる青年の心は、彼の永眠を待つまでもなく、早く既に彼を離れ始めたのである」⁽¹¹⁰⁾。

登張竹風は、『馬骨人言』のような攻撃に応ずるとき、攻撃者を完膚なきまでに反駁することがあるが、だからといって現実において勝利を取られる意味ではない。

登張竹風は30年後、「當時、僕は、高等師範学校の先生をしてゐた。太つ腹の嘉納校長なればこそ、前後四五年の間、僕の言論に対してお小言一つ賜はず思ふがまゝ、に言ふがまゝ、に放任して置かれたのであらう。ところが文句は外部から起つて来た」というところから振り返り、「『ニーチェ』の筆禍事件」について次のように語っている。

明治三十九年の九月十一日、僕は病氣をしてゐて缺勤届を差し出した。

と、その翌日、嘉納先生から「急に懇談したいことがあるから学校に出頭せよ」との親展の私信が来た。病軀を押して急遽罷り出ると、

「この頃、ある高官が文部省に来て『普通教育の源泉たる高等師範学校に、怪しからぬ言論を唱へる者があるさうぢや、以ての外のことではないか。超人とか何とかいつとるさうぢや。超人などといふ思想は突き詰めてゆくと、全く以て恐懼の至りおや。左様な人非人を、文部省は何で今まで不問に附してゐるのぢや云々』と、膝詰談判であつたさうだ。君の言論思想がどんなものであるか、自分は検討しようとは思はぬ。が、事ここに至つては君を庇護することは、校長として君の思想を庇護することになる。校長としてそれは出来ない。但し、それは以前のこと、事は旧聞に属することで、目下は左様な思想は毛頭説いてゐないといふのなら、多小の執り成しも出来ようと思う、が、思想はまた格別のものだ。今後も引き續いてそれを唱道したいといふ君の意見なら、それは君の自由だ。ただ、

それだともはや己むを得ない、この際即刻辞表を出してくれたまへ」⁽¹¹¹⁾

と言われたという。こうして登張竹風は「依願免職」となった。ニーチェの鼓吹者たちは、「美的生活論争」の結果、大きな挫折を経験した。それはまさに、丸善のアンケートと合致している。

樗牛がアンケートの結果を意外に思ったのは、その結果が「ニーチェ」の青少年の間の反響の大きさに合わないことを知っていたからである。『丸善百年史』も「高等学校、中学校の学生に投票されたら、圧倒的に樗牛崇拜の多かった彼等は、樗牛の文でその名知ったニイチェを選ぶものが大多数に上がったかも知れぬ」⁽¹¹²⁾とまとめている。つまり、体制側は勝利したが、ニーチェは青年を手に入れ、当時の青年たちの心を勝ち取ったのである。留学生周樹人もこの青年たちの一人であった。

周樹人は「個人主義」についての論争を身をもって経験したわけではないが、この論争が残した周辺に漂う余波を通して、この論争を考え、自らの価値判断を下しただけでなく、明確な批判を下した。

ドイツ人ニーチェ（Fr. Nietzsche）はツァラトウストラ（Zarathustra）のこトバを借りていった——私は遠くまで歩きすぎて、伴侶を失いひとりとなった。いまの世をふりかえてみると、それは文明の国であり、華麗な社会である。だがこの社会は、確固たる信仰をもっていない。民衆の知識は創造性に欠けている。このような国にいつまでも留まっておられようか。私は父母の国から追放された。まだ期待できるのは子孫のみである、と。これは彼が深思遠望によって近代文明の虚偽と偏向を看破し、今日の人に望みを絶ち、やむをえず未来に思いを寄せたのである。

この言葉は、彼の周りで起こった「ニーチェ」論争のさざ波であるだけでなく、彼の近代的な精神価値の選別でもある。それ以来、「ニーチェ」とその「個人主義」も、一つの方法として中国語の文脈の中に持ち込まれてきた。その後も翻訳・解釈・複製を繰り返し、周樹人の後を追って中国に進出し、現在に至るまで本論を含めて「ニーチェ」についての断片を「魯迅」と呼ばれるテキストの中に並べ、それらが今日に残す意味を考えている。

〔注〕

- (1) 『魯迅全集』、人民文学出版社、1981年、第一巻、57頁参照。（2005年版と同内容、58頁）
- (2) 発表順によると、『摩羅詩力説』（1908.3）2ヶ所、「文化偏至論」（1908.8）4ヶ所、『破惡声論』（1908.12）1ヶ所、合計7ヶ所。
- (3) 『墳』所収、引用は『魯迅全集』、人民文学出版社、1981年、第一巻、48頁参照。2005年版第一巻、50頁。
- (4) 『魯迅全集1 墳・熱風』、学習研究社、昭和五十九年十一月二十二日初版、平成元年七月一日第三刷、74頁。以下に引用する魯迅の日本語訳は、説明をしない限り、すべてこの全集によるものである。

- (5) 同上、88頁。
- (6) 『魯迅全集』、人民文学出版社、2005年、第一卷、61頁。
- (7) 徐梵澄訳『蘇魯支語録』(商務印書館、1992)、尹溟訳『查拉斯圖拉如是説』(文化芸術出版社、1987)、銭春綺『查拉斯圖拉如是説』(生活・読書・新知三聯書店、2007)、ニーチェ著・生田長江訳『ツァラトウストラ』(新潮社、明治四十四 8 [1911] 年)、ニーチェ著・氷上英廣訳『ツァラトウストラはこう言った(上下)』(岩波書店、1967)。藺田宗人訳『ツァラトウストラはこう語った』(『ニーチェ全集』第一卷 [第Ⅱ期全12卷]、白水社、1982)。
- (8) 伊東昭雄の「文化偏至論」訳注(一二)による、『魯迅全集1 墳・熱風』、93頁。
- (9) 徐梵澄訳『蘇魯支語録』(商務印書館、1992)による、117-120頁。
- (10) 尹溟訳『查拉斯圖拉如是説』(文化芸術出版社、1987)による、142-144頁。
- (11) 銭春綺訳『查拉斯圖拉如是説』(生活・読書・新知三聯書店、2007)による、134-137頁。
- (12) 生田長江訳『ツァラトウストラ』、新潮社、1911年、第209-214頁。
- (13) 氷上英廣訳『ツァラトウストラはこう言った(上下)』(岩波書店、1967)による、205-209頁。
- (14) 藺田宗人訳『ツァラトウストラはこう語った』(『ニーチェ全集』第一卷 [第Ⅱ期全12卷]、白水社、1982)による、177-180頁。
- (15) 銭碧湘「魯迅与尼采哲学」(初出『中国社会科学』1982年第2期)、本文引用は『尼采在中国』(郜元宝編、上海三聯書店、2001)による、542頁。
- (16) 伊藤虎丸『魯迅と日本人—アジアの近代と「個」の思想—』、朝日新聞社、1983年、274頁。
- (17) 尾上兼英「魯迅とニーチェ」、『魯迅私論』所収、汲古書院、1988年、56頁。
- (18) 尾上兼英、同上、57頁。
- (19) 尾上兼英、同上、57頁。
- (20) この問題については、拙文「岐路与正途——答「日本魯迅研究的岐路」及其他」、『中華読書報』2012年9月12日3版、『文学報』2012年9月13日第20版、「新批評」第31期。
- (21) 桑木巖翼『ニーチェ氏倫理説一斑』、育成會、明治三十五年、第137頁。
- (22) 前出、『魯迅全集』第一卷、51頁。
- (23) 前出、『魯迅全集1 墳・熱風』、75—76頁。
- (24) 董炳月『“同文”的現代轉換——日語借詞中的思想与文学』、崑崙出版社、2012年、215頁。
- (25) 董炳月、同上、174頁。
- (26) 董炳月、同上、175頁。
- (27) 董炳月、同上、175頁。
- (28) 董炳月、同上、175頁。
- (29) 董炳月、同上、175頁。
- (30) 魯迅『摩羅詩力説』、前出『魯迅全集』第一卷、67頁。
- (31) 魯迅『摩羅詩力説』、前出『魯迅全集1 墳・熱風』、97頁。
- (32) 孫伏園『『托尼文章、魏晉風骨』』、初出1941年10月21日重慶『新華日報』、郜元宝編『尼采在中国』(上海三聯書店、2001年)による、297-298頁。
- (33) 中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913-1983年 魯迅研究學術論著資料彙編第一卷』(中国文聯出版公司、1986年)による、821頁。
- (34) 李長之『魯迅批判』(上海北新書局、1936)参照、131、223頁。竹内好『魯迅』(『近代的超克』、李冬木、孫歌、趙京華訳、三聯書店、2005)参照、59、64、69、107、114、115頁。
- (35) 竹内好『魯迅』、『竹内好全集』第一卷、筑摩書房、1980年、68頁。
- (36) 郭沫若「魯迅与王国維」、初出『文芸復興』第二卷第三期、1946年10月、前出『1913-1983年 魯迅研究學術論著資料彙編第四卷』281-286による。
- (37) 張釗貽『魯迅、中国「温和」的尼采』、北京大学出版社、2011年、20頁。
- (38) 張夢陽『中国魯迅学通史』全六卷、広東教育出版社、2005年。
- (39) 前出、張釗貽『導論二：「魯迅與尼采」研究概述』、20-54頁参照。
- (40) 前出、伊藤虎丸『魯迅と日本人』、32-33頁参照。
- (41) 前出、伊藤虎丸、同上、56-58頁参照。

- (42) 前出、伊藤虎丸、同上、60-61頁参照。
- (43) 劉柏青『魯迅与日本文学』、吉林大学出版社、1985年。
- (44) 前出、張釗貽、2011。
- (45) 潘世聖『魯迅・明治日本・漱石』、汲古書院、2002年。
- (46) 修斌『近代中国におけるニーチェと明治日本——「近代個人主義」認識を中心に』、星雲社、2004年。
- (47) 『魯迅研究月刊』1997年第6期、題名「早期魯迅尼采考——兼論魯迅有沒有讀過勃蘭總斯的『尼采導論』」参照。
- (48) 周遐寿『魯迅的故家』、上海出版公司、1953年、引用『魯迅回憶錄（專著・中冊）』、魯迅博物館魯迅研究室魯迅研究月刊選編、北京出版社、1999年、1056-1057頁引用。
- (49) 石井研堂「独逸語の始」、『明治事物起源』「第七編教育学術部」（全八冊之第四冊）、筑摩書房、1997年、297頁。
- (50) 北京魯迅博物館『魯迅研究月刊』、2003年第3期。
- (51) 前出、石井研堂『明治事物起源』第四冊、298頁。
- (52) 前出、石井研堂、同上、298頁。
- (53) 西周『百一新論』、明治七（1874）年。本論は『明治啓蒙思想集・明治文学全集3』、筑摩書房、1967年の収録本による。
- (54) 井上哲次郎談話摘録、前出、石井研堂第四冊「精神科学の訳語」、220頁参照。
- (55) 前出、石井研堂第四冊、279頁。
- (56) 『獨逸学協會学校五十年史』、8頁。北岡正子「独逸語専修学校に学んだ魯迅」の注釈より引く、『魯迅研究の現在』、汲古書院、1992年、38頁。
- (57) 同上、北岡正子、13頁。
- (58) 同上、北岡正子、15頁。
- (59) 高松敏男「日本における『ツアラトストラ』の受容と翻訳史」、『ニーチェから日本近代文学へ』、幻想社、1981年、参照。
- (60) 前出、張釗貽『魯迅、中国「温和」的尼采』の第二章「“温和”尼采的東漸與魯迅的接受」、150-152頁。
- (61) 前出、高松敏男、5-6頁。
- (62) 茅野良男「明治時代のニーチェ解釈——登張・高山・桑木を中心に三十年代前まで」、『実存主義』、理想社、1973年、3頁。
- (63) 桑木巖翼『ニーチェ氏倫理説一斑』、育成会、明治三十五年、2頁。
- (64) 原題『文明批評家としての文学者（本邦文明の側面評）』、署名「高山林次郎」、『太陽』七卷一号、明治三十四〔1901〕年1月5日、本論はこの原文による。『高山樗牛 斎藤野の人 姉崎嘲風 登張竹風集』、明治文学全集40、筑摩書房、1967年の所収本参照。
- (65) 原題『美的生活を論ず』、署名「樗牛生」、『太陽』七卷九号、明治三十四年8月5日、本論はこの原文による。『高山樗牛 斎藤野の人 姉崎嘲風 登張竹風集』、明治文学全集40、筑摩書房、1967年の所収本参照。
- (66) この4人の学歴に関しては、前出『高山樗牛 斎藤野の人 姉崎嘲風 登張竹風集』付録「年譜」による。
- (67) 『ニイチェと二詩人』、人文社、明治三十五年。
- (68) 『明治哲学思想集』、明治文学全集80、筑摩書房、1967年、付録「年譜・桑木巖翼」による。
- (69) 前出、伊藤虎丸、同上、60頁。
- (70) 西尾幹二は日本の「ニーチェ学史」において、桑木巖翼及びその『ニーチェ氏倫理説一斑』について、「桑木のニーチェ理解の水準はきわめて低く、ほとんど全篇見当外れの連続といってよい。おまけに桑木自身のニーチェへの共感も欠けているので、樗牛や竹風ら文学者が抱いた熱意さえもない。じつに後味の悪い奇怪な研究書である」と酷評している。引用は「この九十年の展開」、高松敏男、西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜 ニーチェ全集別巻』、白水社、1982年、516-518頁による。

- (71) 前出、北岡正子注釈(31)、39頁参照。
- (72) 魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅年譜』第一卷参照。
- (73) 前出、『魯迅年譜』第一卷、第119頁。
- (74) 仙台における魯迅の記録を調べる会編『仙台における魯迅の記録』、平凡社、1978年、第104頁。
- (75) 許寿裳『亡友魯迅印象記』(峨嵋出版社、1947)、本文は『魯迅回憶録(專著・上册)』、魯迅博物館魯迅研究室魯迅研究月刊選編、北京出版社、1999年より引用。
- (76) 前出、北岡正子「独逸語専修学校に学んだ魯迅」、『魯迅研究の現在』、5-43頁参照。
- (77) 同上、北岡正子、36頁。
- (78) 周啓明『魯迅的青年時代』(中国青年出版社、1957)、前出『魯迅回憶録(專著・中册)』、821頁より引用。
- (79) 前出、北岡正子、34頁。
- (80) 田山花袋「丸善の二階」、『東京の三十年』所収、博文館、大正六年、『明治文学回顧文学集(二)』、明治文学全集99、筑摩書房、1968年、64-65頁による。
- (81) 生方敏郎「明治時代の学生生活」、『明治大正見聞史』、中央公論社、中公文庫 M81、昭和五十三年、89頁。
- (82) 同上、生方敏郎、159頁。
- (83) 「書簡・一一〇七三一 許寿裳宛」、『魯迅全集14 書簡I』、学習研究社、昭和六十年六月二十五日初版、平成四年四月十一日第三刷、56頁。
- (84) 周作人「東京の思い出」、『学燈』昭和十二年四月号、木村毅『丸善百年史(上卷)』、丸善株式会社、1980年、628-629頁による。中国語版は『宇宙風』26期、1936年10月刊、後『瓜豆集』所収。
- (85) 許寿裳『亡友魯迅印象記』、峨嵋出版社、1947年、前出、『魯迅回憶録(專著・上册)』、223頁による。
- (86) 前出、周作人「東京の思い出」、630頁。
- (87) 周作人「東京的書店」、『周作人文類編7・日本管窺』、第79頁。日本語訳は中島長文『周作人読書雑記1』、平凡社、2018年、115頁。
- (88) 周作人「東京の思い出」、『学燈』昭和十二年四月号。
- (89) 木村毅著『第二編』「第十三章 ケンペルとシーボルト」の「五 周作人」、『丸善百年史(上卷)』、丸善株式会社、1980年、628-631頁参照。
- (90) 前出、高松敏男、西尾幹二、茅野良男、『高山樗牛 斎藤野の人 姉崎嘲風 登張竹風集』参照。
- (91) 「欧州における徳義思想の二代表者フリデリヒ、ニツシュ氏とレオ、トウストイ伯との意見比較」(『心海』第四号、無署名、明治二十六[1893]年十二月)、「ニツシュ氏とレオ、トウストイ伯徳義思想を評す」(『心海』第五号、無署名、明治二十七[1894]年一月)、前出、高松敏男、西尾幹二、200、289-298頁参照。
- (92) 西尾幹二は「二論文の内容については、ニーチェとトルストイというおよそ親縁性のない二精神を並べて論じているというだけでも、時代的限界は明らかだといえる」とコメントしている。前出、高松敏男、西尾幹二、512頁。
- (93) 多くの例から数編参考文献を記しておく。大塚保治「ロマンチックを論じて我邦文藝の現況に及ぶ」(1902)、『明治文学全集79・明治藝術・文学論集』、筑摩書房、第308、315頁、鳥谷部春汀「大隈伯と陸奥伯」(1902)、同全集92『明治人物論集』第38頁、小山内薫「青泊君」(1906)、同全集75『明治反自然派文学集(二)』第180頁、白柳秀湖『鐵火石火(评论集)』(1908)、同全集83『明治社會主義文学集(一)』第259-260頁、柳秀湖『黄昏(小説)』(1909)、同『明治社會主義文学(一)』第191頁、郡虎彦「製作について」(1912)、同全集79『明治文学全集76・初期白樺派文学集』第332頁；木下杢太郎「海国雑信(北原白秋に送る)」(1912)、同全集74『明治反自然派文学(一)』第271頁。
- (94) 「兩地書・二四」、『魯迅全集13 兩地書』、学習研究社、昭和六十年四月二十五日初版、平成四年四月十一日第三刷、108頁。
- (95) 丸山通一「博士加藤君の『先哲未言』を評す」、『太陽』、1896年5月5日、前出、高松敏男、西尾幹二、第300-301頁参照。

- (96) 森鷗外「『月草』叙」(1896)、前出『明治芸術・文学論集』、第248頁。
- (97) 無署名「ニーチェ思想の輸入と佛教」、『太陽』、1898年3月、前出、高松敏男、西尾幹二、第302-305頁。
- (98) 境野黄洋「羸弱思想の流行(ニイツェ主義と精神主義)」、1902年2月、『明治文学全集87・明治宗教文学(一)』参照。
- (99) 前出、高松敏男、西尾幹二、512頁。
- (100) 『馬骨人言』は『読売新聞』に1901年10月13日から11月7日まで無署名で連載されたが、坪内逍遙の筆であることはすぐにわかった。これは「美的生活論争」の中で最も長く、最もセンセーショナルな文章である。逍遙が文中で、ニーチェの思想を「極端な個人主義」「利己主義」「差別主義」とし、「悪精神の盲目的な反動」と攻撃している。またこの文がふざけた筆致で展開されるので、社会的反響も特に大きい。しかし内容の構成をみると、この文が相手を批判の対象としていると同時に、「対象」に関する内容の三分の一近くは、高山樗牛と登張竹風、とくに後者から読み取ったものである。引用は『近代文学評論大系2・明治Ⅱ』、角川書店、1972年による。
- (101) 井上哲次郎編『哲学叢書』第1集、集文閣、1901年、第1074頁。
- (102) 生方敏郎「明治時代の学生生活」、前出『明治大正見聞史』、第100頁。
- (103) 登張竹風「美的生活論とニーチェ」、『帝國文学』、1901年9月号、引用は『近代文学評論大系2・明治Ⅱ』、角川書店、昭和四十七年、169、170頁による。
- (104) 高松敏男「日本における『ツアラトストラ』の受容と翻訳史」、『ニーチェから日本近代文学へ』、幻想社、1981年、第11頁。
- (105) 杉田弘子「ニーチェ解釈の資料的研究——移入初期における日本文献と外国文献との関係」、東京大学国語国文学会『国語と国文学』、1966年5月、第21-34頁参照。
- (106) 斎藤野の人「国家と詩人」、『帝國文学』、1903年6月号、前出『明治文学全集40』、第106-107頁参照。
- (107) 夏目漱石「私の個人主義—大正三年十一月二十五日学習院輔仁会において述—」、『輔仁会雑誌』、1915年3月22日、三好行雄編『漱石文明論集』所収、岩波書店、1986年。「国家の平穩な時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きをおく方が、私にはどうしても当然のように思われます」という。第137頁。
- (108) 與謝野鐵幹「高山樗牛に与ふ」、『明星』、1902年2月号、本論は前出『近代文学評論大系2・明治Ⅱ』、第248-257頁参照。
- (109) 前出、木村毅『丸善百年史(上巻)』、第457-473頁参照。
- (110) 橋川文三「高山樗牛」、前出『明治文学全集40』、第392頁。
- (111) 登張信一郎(竹風)「ニーチェの復活」、『人間修行』、中央公論社、1934年、引用は高松敏男、西尾幹二『日本人のニーチェ研究譜 ニーチェ全集別巻』、第458-459頁。
- (112) 前出、木村毅『丸善百年史(上巻)』、第468頁。

【付記】

* 本篇はシンガポール南洋理工大学「尼采與中国現当文学国際学術研討会」(張釗貽教授〔Assoc Prof. Cheung Chiu-Yee〕召集ならびに司会、2012年11月22-23日、新加坡南洋理工大学文理学院“Nietzsche and Modern and Contemporary Chinese Literature”. The conference is supported by the Centre for Liberal Arts and Social Sciences (CLASS) and the Confucius Institute at Nanyang Technological University (NTU). It at NTU in 22-23 November 2012) に提出した論文を踏まえて作成したものである。

(り) とうぼく 中国学科)

2022年11月10日受理